

Love Mail

前篇、(°▽°)ノ



©SETO

枕元で携帯のアラームが鳴っている。

木原(きはら)葉太(ようた)は意識の半分以上を夢の中に置いたまま、手探りでアラームを止めた。まだ眠い。もう朝だなんて信じられない。だってついさっき布団の中に入ったばかりだ。

しかし現実、昨夜の零時に葉太が布団に入ってから七時間が経過しているのであり、その時の流れは今、惰眠を貪っている間にも刻一刻と流れている。起きなきゃ、でもあと少し、その葛藤を繰り返しているうちに、徐々に意識が浮上してくる。起きなきゃ。葉太は最終的に意を決して瞼を持ち上げた。それでもまだ半分夢の中のような心地でベッドから降りる。携帯を見れば、さっきアラームを止めた時からもう、十五分も経過していた。

「・・・・・・・・あー」

なんでさっさと起きなかったんだろう、と後悔するのも毎朝のこと。布団を跳ね飛ばして起き上がり、部屋を出て階段を駆け降りると、洗面所に飛び込んだ。

栗色に染めた髪は、寝癖でふわふわと逆立っていた。髪の毛がやわらかいせいで、毎朝苦労させられる。が、それにしたって今日のハネ具合は芸術的な勢いだ。もしかしてと歯磨きをしながら窓を開けると、案の定曇り空が広がっている。葉太の髪の毛は湿気に弱い。

あいつみたいな直毛だったら良かったのに、なんてことを考えても仕方がない。なんとか髪をそれらしく整えて、部屋へ戻り制服に着替える。といっても、好きなTシャツを着て、校章が入った白いワイシャツを羽織るだけだ。本来ならその白いワイシャツにきっちりとネクタイをし、紺色のブレザーを羽織るのだが、つい数日前まで夏服だったのにそんな暑苦しい格好をしてられない。

今日は曇りだし、明るい黄色のTシャツにしよう。もぞもぞと着替えていると携帯が鳴った。葉太が好きな曲のワンフレーズだけを歌った携帯は、着信がメールであることを知らせていた。時計を見れば七時半過ぎ。メールを見なくても差出人はわかった。

同学年の水野(みずの)清隆(きよたか)。タイトルには『緊急事態』とある。

『おはよう。現在時刻7032。こちら児童公園北入口にて待機中。現在女子小学生二名にナンパされております。逃走をはかるため待ち合わせ場所の変更を願います。どうぞ』

まるで軍人が無線機で喋っているような雰囲気だが、これは最近清隆が始めた遊びだ。普通のメールが飽きたとってこうなった。いってみれば世間でギャル文字やデコレーションメールが流行ったのと同じ感覚だ。葉太は少し考えて返信を打った。

『おはよう。今から家を出る。待ち合わせ場所は児童公園内男子トイレ個室でどうか。どうぞ』

送信してから、葉太はスクールバッグを引っつかんで部屋を飛び出した。

メールがまた着信する。

『こちら児童公園内男子トイレ個室。女子小学生からの逃走に成功。ついでなので排泄物処理を行いながら待機します』

葉太は「汚ねえ報告すんなよ・・・」とぼやきつつ、『了解』と返信した。

玄関を出て、待ち合わせをしている児童公園に走る。

途中、集団登校をする小学生の群れに幾度も遭遇した。公園に辿りつき、片隅にひっそりと佇む公衆トイレに駆け込む。

「キヨ、いる？」

男子トイレの個室は三つあるが、そのうちの一つが使用中だった。葉太が声をかけると水の流れる音がして、ほどなくドアが開いた。

「だめだ。便秘だ」

舌打ちと共に出てきたのは、小学生にもナンパされるイケメンだ。寝癖知らずの艶やかな黒髪と、鉤でそぎ落としたような鋭利な輪郭、加えて葉太より頭一つ分高い長身は、いつも女子達の熱い視線を集めてやまない。更に成績優秀ときていて、先生からの覚えもめでたい。正直、妬みたいほどに羨ましい。

清隆は葉太ほど制服を着崩してはいなかったが、首が絞まる感覚が気持ち悪いとってネクタイはいつも外している。肌蹴たシャツの胸元から見える鎖骨と喉仏のラインが、男のくせに妙にエロイ。イケメンのフェロモンというやつだろうか。清隆は「やっぱり家じゃないと集中できないな」とぼやきながら手を洗っていた。

「小学生にナンパされたって？」

公園から出て学校へと向かいながら、葉太がニヤニヤして尋ねると、清隆は疲れたようにため息をついた。

「携帯番号教えてくれってしつこいんだ。なんで最近の小学生は一丁前に携帯なんか持ち歩いてるんだ……」

「いいなあ。俺、女の子に番号教えてなんて言われたことないのに」

「じゃあ葉太の番号教えとけば良かったな」

「あ、俺の対象年齢は十五歳以上なんで。……つーかさ、あの軍隊メールやめにしない？ ちょっと面倒っていうか」

葉太が言うと、清隆は「またか」と顔を顰めた。

「葉太、この間の幼児言葉メールもすぐ気持ち悪いとか言って嫌がったじゃないか」

「ったりまえだろ！ 『おそいでちゅ』『いま行きまちゅ』とか、高校生の男がやってもキモイだけじゃん」

「そう？」

悪びれた様子もなく清隆は小首を傾げる。美形のためにそれだけでも絵になる仕草だ。確かにこいつが幼児言葉を使って甘えても、女子はカワイイーなんて黄色い声で騒ぐだけだろう。なんだか腹立だしい。

「じゃ、葉太も何か考えろよ。次は何にするか」

「もー普通でいいじゃん……」

「だめ」

まったくワガママな奴だ。

葉太が清隆と知り合ったのは去年、高校の入学式だ。

同じクラスで隣の席になり、葉太から「よろしく」と声をかけた。その時の清隆の態度は今でも鮮明に覚えている。流し目でチラリとこちらを一瞥した後、「ああ」と低い声で無愛想に呟き、それきり無言だった。清隆が極度の人見知りらしいということを知ったのは入学して一週間程過ぎたころだった。葉太だけでなく誰に対してもそんな態度だったし、聞けば中学の時もろくに友達はいなかったらしい。だけど葉太が根気よく話し続けるうちに、清隆は徐々に喋るようになった。話をするようになると清隆はいい意味でふざけた奴で面白く、一年が終わる頃には親友と呼べるようになり、今では朝からシモの話までする仲だ。

学校の正門をくぐる頃になっても、次のメールのルールは決まらなかった。

「じゃあさー、無難に敬語とか」

葉太が提案すると、清隆は「そうだなあ」と唸った。

「あんまりパツとしないな。具体的にどんな感じ」

「『水野君へ。お元気ですか、僕は元気です』的な」

「それだったらまだ、女言葉でメールする方がいい。葉太から『アタシ元気よ！』って感じでメールきたらテンション上がる」

「なにそれ。意味わかんない」

葉太がぼやきながら玄関口に入ると、下駄箱の周囲は登校してきた学生でごった返していた。一年の時は同じクラスだったけど、二年になった今は清隆とは別のクラスだ。下駄箱も葉太が七組で清隆が一組なので、かなり離れてしまっている。学校にいる間は、ほとんど会って話をすることもない。連絡手段といったらそれこそメールだけになる。だから毎朝、くだらない話しかしていないとはいえ、ここで別れる時はいつも葉太は寂しい気分になった。

「おい、ポーッと突っ立ってんじゃねえよ」

野太い声が背後で聞こえて、葉太はゲツと思った。振り返ると、葉太と同じクラスの岩田(いわた)邦雄(くにお)がいた。ゴリラみたいな体格で、中身も気が立った猿みたいにヒステリーな奴だ。目下、葉太が一番苦手な相手である。

「・・・・・・・・はよ、岩田」

それでもおざなりに挨拶をすると、岩田は「おう」と偉そうに返事をする。彼は無言のままの清隆を見てフンと鼻を鳴らした。

「水野は挨拶なしかよ。それとも恥ずかしがり屋で声も出ませんてか」

「・・・・・・・・」

「ケッ、相変わらず根暗な奴だな」

「おい、やめろよ」

聞いてられなくて葉太は思わず岩田を睨んだ。岩田が爬虫類みたいな目をこちらに向ける。「水野、お前って木原にだけはいつもベツタリだよな。なんなの、お前らってデキてんの？」

「全然面白くない」

葉太は思わず吐き捨てた。中学生でも、もっとまともなインネンのつけ方をするだろう。岩田は笑った。

「俺は水野と喋ってたよ。それとも、木原を通さないと話もできないのか？ とんだ箱入り彼氏だな」

「……………っ、キヨ、なんか言ってやれよ！」

葉太は自分が百倍怒鳴りたいのを我慢して、清隆を煽った。しかし清隆はじっと岩田を見るだけで何も言わない。岩田は言い返さない清隆に満足気に笑い、勝ち誇った態度で立ち去っていった。葉太はその後姿にイライラして、清隆を睨む。

「なんで言い返さないんだ」

「……………岩田って」

神妙な面持ちで清隆は呟いた。

「可愛いよな」

「はあ!？」

「絡み方が、好きな子を苛めるアレに似てないか。もしかして岩田、俺のこと……………」

恥らうような素振りを見せる清隆に、葉太はゾーッと背筋に鳥肌が立った。

「やめろ、やめて」

緊張感がまるでない清隆に、葉太は脱力した。岩田とは、去年同じクラスだった。その頃からああやって、何かにつけて清隆に絡む。

理由は簡単、当時岩田が好きになった女子達が、ことごとく「水野君が好きなの」と言って岩田を振ったからだ。それ以来、岩田は靴底にくっついたガムのように粘着質に、清隆を敵視している。

加えて、清隆は親しい人間以外とはろくに口を利かない。何を言われても無言で受け流すので、岩田は清隆のことを大人しくて気弱な男だと思っている。今だって、清隆がいびられてビビっていると思いきすれ、まさか平然とゲイ疑惑をかけているなどとは、露ほども思っていないだろう。

「キヨがあいつの相手すんの、面倒くさがる気持ちわかるけど！ 俺、岩田にキヨが舐められるのだけは、どーしても許せないんだっ」

「別に面倒くさがってるわけじゃない。葉太も知ってるだろ、俺は内弁慶なんだ。言い返すなんて、とてもとてと」

「そんだけじゃあしゃあとしてて、何が内弁慶だよ！」

「まあ、実害が出るようなら考えるよ」

どうしてこの男はこう、のらりくらりとしているんだ。焦れたくてヤキモキする。不貞腐れている葉太を見て、清隆が微笑んだ。

「心配するな。男と付き合う時は俺、真っ先に葉太を選ぶから」

「誰もそんな心配してないっつーの。大体、選ぶも何もキヨの男友達って俺だけじゃん」

言ってから、あ、怒るかも、と焦った。いくら本当のことでも、いや本当のことだからこそ傷つけたかもしれない。

けれど清隆の対応は、嫌味なくあっさりとしたものだった。

「そういう可愛くないことを言うなよ。そうだ、今度のメールのルールはラブメールにしよう。俺の葉太への愛を教えてやる」

「は？」

葉太が聞き返したところで予鈴が鳴った。清隆は「ま、後で俺からメールするから」と慌しく立ち去ってしまう。

なんだ、ラブメールって。葉太は嫌な予感がした。しかしこちらものんびりしている暇はないので、急いで靴を履き替えて教室へ向かう。

廊下を走りながら葉太は、怒ってくれる方がまだ健全だよなどと、そんなことを思った。

曇っているせいか、教室の窓は開け放しなのに空気が肌に纏わりつくように湿っている。教壇では担任が、来年に迫る受験について口酸っぱく熱弁していた。

清隆は友達を作らない。いくら人見知りだからって、もう高校に入って一年と半年。なのに未だに清隆の口から、他の友達の名前を聞いたことがなかった。

人を避ける理由として、最初は中学の時にイジメにでも遭っていたのかも訝しんでいたのだが、どうもそうでもないようだ。清隆は、人を避けてはいるが怯えている様子はない。岩田みたいなのに絡まれても顔色一つ変えないし、教師とは普通に喋っている。

どうしてなのか本人に聞いてみたことはあったが、いつもの調子で適当にかわされて終わった。踏み込まれたくないという頑なな態度の片鱗を感じて、葉太はまだ清隆が自分にも、完全に心を開いてくれているわけではないのだと寂しくなった。しつこくすれば清隆は葉太すら避け始める気がして、深入りする勇気が出ない。

友達を作った方がいいなんて、余計なお世話なのは百も承知だ。人といることが清隆のストレスになるなら、いない方がいいのかもしれない。

だけど友達がいなくて、清隆が岩田みたいなのにナメられることが、葉太にはどうしても許せないのだ。岩田なんてまだわかりやすく絡んでくるからいいけど、女子絡みで清隆を逆恨みしている男は他にもいそうだった。そういう時に清隆を守ってくれる友達がいれば、それだけで心強い。

S H Rが終わるなり、葉太のズボンのポケットで携帯が震えた。着信は清隆からだった。そういえば何かメールするとか言ってたっけ、と思いつつメールを開き、葉太は怯んだ。

『件名・タンポポのように可憐な君へ』

傍にいられない間は、いつも葉太のことだけを考えています。俺の葉太への想いが溢れ出しそうなと同じで、空もつらそうな色をしている。今朝、君は息を切らせて俺のもとに走ってきてくれたけれど、傘を持っていなかったのが気がかりです』

「・・・・・・・・普通に雨降りさうだけど傘持ってんのって聞けばいいじゃん・・・・・・・・」

耐え切れずに、葉太は小さく唸った。これがラブメールというやつか。恋人みたいに甘く書くルールってことか。不気味さを通り越して恐怖すら感じる。いったいどんな顔で、こんな文面を打つのだろう。

想像力を働かせてみたが、無表情で作業をこなしている清隆の姿しか思い浮かばなかった。あいつはこういうくだらないことを、真剣にできる男だ。

『キモイ迷惑メールを送ってくるなよ。今朝は急いでて傘忘れた。つか気づいてたんなら公園にいる時言ってくればいーじゃん。取りに戻ったのに』

叩き付けるように文字を打ち、送信ボタンを押す。するとすかさず返信があった。

『ぜんぜんラブを感じない。葉太は俺のことが嫌いなのか。寂しいよ』

清隆は完全に遊びに没頭してしまっているようだ。うざいので無視しようかとも思ったが、最後の寂しいという文字が葉太の心に引っかかる。軽い冗談だろうとは思うのだが、葉太はウサギとか犬とか寂しがり屋の動物に弱い。どうにも無視できなくて、葉太は仕方なくメールを打ち直すことにした。

清隆がタンポポ云々なんていうのは、葉太が今日、黄色いシャツを着ているからだろう。それなら清隆は・・・と今朝の格好を思い出してみる。葉太と違って清隆は割ときちんと制服を着ていて、堅苦しいブレザーもしっかり羽織っていた。特徴といえばネクタイをしていないことくらいだ。

『件名・クールビズで素敵なアナタへ』

自分で打っていて、何やってんだらうと恥ずかしくなる。万が一にも誰かに携帯を覗かれたら終わりだと思いながら、葉太は机の下で本文を打ち込んだ。

『さっきは乱暴なメールを打ってごめん。でもこのラブメールというやつは恥ずかしいので困ります。あと傘は忘れました』

送信して少しの間待っていると、返信があった。タイトルにはレスマークがついているだけでホッとすする。もうやめてくれたんだな、と思ってメールを開き、葉太は固まった。

『葉太の恥じ入る姿はとても愛らしいので、俺は大好きです。今すぐ会いに行きたいくらいだけど、もうすぐ無粋なチャイムが鳴る時間なので我慢します。傘、やっぱり忘れたのか。でも心配するな。俺の置き傘があるから、二人で相合傘をしながら帰ろう』

チャイムが鳴ったので、葉太は携帯を閉じてポケットにしまう。つつこんだり反応したらまた変なメールが返ってくるに違いない。ここは、できるだけ清隆を刺激しないようにしましょう。

しかし一時間目が終わり、休憩時間に入るなりまた携帯がズボンのポケットで震えた。

『件名・ヒヨコのように愛らしい君へ』

今度はヒヨコときた。やっぱり黄色ネタでいじり倒してくるつもりらしい。

『思えば葉太に最初に出会ったのも、こんな曇り空の日だった。偶然にも隣の席になった葉太がよろしくと笑顔で声をかけてくれた時、俺は正直、馴れ馴れしそうな奴が隣になって嫌だなと思ったことをよく覚えているよ。だけど今、俺にとって君はかけがえのない唯一の人だ。まるで、筆箱の中になくってはならない消しゴムのように。いくら書きやすく有能なシャーペンを揃えても、シャーペンの頭についている小さな消しゴムではうまく消せずに紙が汚れるだけだ。とても代わりにはならない。そんなわけで、今から購買に行ってくる』

どうやら消しゴムを忘れたので、購買に買いに行くつもりらしい。入学式の天気なんて覚えてないし、馴れ馴れしくてすみませんねって感じだ。

清隆は完全に愉しんでいるようだ。心臓がむず痒い思いをさせられているのは自分だけか。それならばと、葉太は気味の悪い文面を送りつけてやることにした。

『もちろん俺にとってもキヨは大事な人だよ。キヨになら、俺の大事なものをあげてもいいって思ってる。どうか俺の消しゴムを受け取ってほしい』

今回の清隆と同じで、葉太も忘れるたびに購買に行くものだから、筆箱の中には消しゴムが三つほど入っている。ゴロゴロして邪魔なので、誰かが使ってくれるならそれに越したことはない。

メールの返信はすぐにあった。

『君が大事にしているものを、俺が受けとっていいのか』

『いいよ。あんまり時間がないから、早く来て』

俺って奴はつくづくノリがいいよなあと思いながら、葉太は消しゴムを一つ掴んで教室を出た。一組は一つ上の三階にある。階段がある方向へ廊下を歩いていると、ちょうど清隆が階段を下りてくるのが見えた。

「キヨ！」

葉太が名前を呼ぶと、清隆が顔を上げた。消しゴムを放り投げるとうまくキャッチする。清隆が笑った。

「悪いな、サンキュー」

「いいけど、あのメールちょっとウザイぞ」

「愛情表現だろ。じゃあな」

清隆は消しゴムを握った手を軽く振って、用は済んだとばかりに階段を駆け上がっていった。ベタベタした砂糖菓子みたいなメールを送ってくるくせに、いつもと変わらない態度はなんだかギャップがあって変な感じだ。

やれやれと教室に戻ろうとして、葉太は廊下にいた女子達が頬を染めて階段を眺めていることに気づいた。舞い上がった声が聞こえてくる。

「うー、やっぱカッコイイよねえ」

「普段は冷たいくらい無表情なのに、笑うと意外に可愛いんだね」

「彼女いないんだっけ。私、頑張ってみようかな……」

女子達はきゃあきゃあ騒いでいる。それを見て葉太は、そうだ、と思いついた。

清隆は彼女を作ればいいんだ。そうしたら他の女子達は清隆を諦めるだろうし、女子が落ち着けば、岩田みたいに嫉妬にうるさい男連中も少しは静かになるだろう。友達がいらなくなっても、男子高校生なら誰だって彼女は欲しいはずだ。

今度、清隆に好きな女の子はいるのか聞いてみようと思いつきながら、葉太は教室に戻った。

清隆からのメールはしつこく続いたが、葉太は今までの軍隊メールやら幼児言葉メールやらで免疫がついていたせいも、あっさり慣れて適当に相手をしていた。

しかし、いったい清隆がこれのどこが面白いのかまでは理解できない。幾度目かのメールの後、葉太は思い切って聞いてみた。

『あのさ、このメールのやり取りって、何か意味あんの？』

すると、答えはすぐに返ってきた。

『あるよ。葉太が俺のことを考える』

これにはさすがに赤面した。なんだか普通に口説かれている気分になってくる。葉太はメールを打ち返した。

『メールしてなくたって、いつも考えてるけど』

友達として、これでもいろいろ心配してるんだぞ、と葉太は心の中で毒づきながらメールを送信した。その気持ちが伝わったのか、清隆からの返信はないまま休憩時間は終了した。

四時間目、葉太達のクラスは家庭科になっていた。今日は調理実習でマフィンを焼くことになっている。女子は楽しそうにしていたけど、男子のほとんどは「男の手作りマフィンってサムイよなあ」などとやる気なさげだった。特に岩田あたりなんかは男連中とふざけるばかりで、誰かが作ったものを後でかすめ喰う気が満々だった。

「たくさん作れた人は、後で先生がラッピング袋を分けてあげるからね。次はちょうど昼休みだし、お友達と一緒に食べるといいわ」

先生の一言に、女子達は嬉しそうに「誰にあげよう」とはしゃいでいた。そういった可愛らしい雰囲気は大変癒されるものがあったが、少なくとも自分に回ってくる雰囲気がないことくらいはわかるものだ。わびしい気持ちで葉太は焼き上がったマフィンを取り出す。表面はこんがりと焦げ目がついているが、一つ切ってみると中は綿をつめこんだようにふわりとしている。

完璧だ。葉太は心から満足した。実を言うと料理は、小学生の頃から葉太の密かな趣味だ。特にお菓子作りは甘党の母親から叩きこまれている。今回は紅茶葉入りだけれど、本当なら果物を入れたって美味しいし楽しいんだよなあと葉太が悦に浸っていると、近くにいた女子が声をかけてきた。

「うわ。木原君の、すごくおいしそうに焼けてるね。いい香り！」

葉太が「いやあ、そんな」と鼻の下を伸ばして照れていると、彼女、阿部美香は「一個もらってもいい？」とねだってきた。長い睫毛の大きな瞳で見つめられ、断れる男がどこにいるだろう。

「もちろん。何個でもどうぞ」

「ほんと？ ありがとー」

美香は嬉しそうにマフィンの一つ取った。「すごくおいしい」と嬉しそうに頬張る姿は、なんだかハムスターに餌付けしているみたいで、葉太は見ていてほっこりとした気分になる。美香は食べ終わった後、頬を紅潮させて葉太を見た。

「すごいよ。なんでこんなおいしく作れるの。ねえ、私のも食べてみて？」

そう言って、美香は自分のトレイごとマフィンを出してきた。綺麗な丸型の可愛いマフィンだ。葉太は女子の手作りお菓子を目の前に差し出されてドギマギした。

「あ、ありがとう」

葉太は緊張しながらも一つ、口の中に入れる。途端、口の中に広がったのは香ばしい甘み・ ・ ・ではなく、舌を刺激する苦味だった。おまけになんだか、ジャリジャリする。

「どうかな？」

幼稚園の頃、好奇心で齧った泥団子を思い出した。なんて、とてもそんなこと言えるはずがない。葉太は何とか呑み込んで、精一杯の笑顔を貼り付けた。

「・ ・ ・ ・ ・うん。俺は好きな味かなー・ ・ ・ ・ ・なんて」

「ほんとう!？」

美香は「よかった」と嬉しそうに笑う。

どこか恥らう様子の彼女に、葉太はまさか彼女は自分に気があるのでは、と期待した。美香はもじもじとした仕草で葉太を見た。

「あのさ、木原君。お願いがあるんだけど」

「な、なに？」

「木原君って、水野君と仲いいよね？ このマフィン、水野君に渡してもらえないかなあ？」

「・ ・ ・ ・ ・」

わかっていた。ある程度は、そういう可能性も予測していた。葉太はせめて失望感を顔に出さないよう、笑顔を崩さないように努力した。

「えっと・ ・ ・ ・ ・そういうのは、自分で渡した方がいいんじゃないかな」

「だめなの。私、一度水野君に告白してフラれてるから」

なんだと。葉太は耳を疑った。そんな話はもちろん清隆からは聞いてないし、それに安部美香は学年でも一、二を争うほど可愛い女子だ。それなのに清隆の奴は、あっさりフッてしまったというのか。

なんてもったいない。美香は「でもね」と頬を染めて潤んだ瞳を俯けた。

「やっぱり諦めきれないから・ ・ ・ ・ ・。私がまだ想ってるってことだけ、知っておいてほしくて」

「それなら尚更、自分で渡した方が」

「ううん。また断られたらさすがに立ち直れないし。それに付き合いたいとかじゃなくて、受け取ってくれるだけでいいの。だから、お願い」

葉太は心底、清隆を羨ましいと思った。岩田の気持ちがちょっとだけわかったような気がする。大勢の女の子にモテなくてもいいから、一度でいいから誰かにこれだけ想ってもらいたいものだ。

真剣な彼女に冷たくすることなどできなくて、葉太は「わかったよ」と頷いた。

「渡すだけでいいなら」

「本当？ ありがとう、木原君」

嬉しそうに微笑む笑顔をもらえただけで、満足するとしておこう。葉太はラッピングされたマフィンを美香から預かり、必ず渡すと約束した。

昼休み、葉太はいつも清隆と昼食を済ます。購買で何か買おうと思っていたので、鞆から財布を取り出して尻ポケットにねじこむ。すると教壇近くにいた美香が様子を窺うようにこちらを見ている事に気づく。葉太が机から預かったマフィンを取り出して、今から渡しに行くとアピールすると、彼女はホッとしたように表情を和らげた。

付き合いたいとかじゃない、なんて言っていたけれど、これはなかなかどうして重たい気持ちが詰まっていそうだ。葉太はしっかりと重大任務であるマフィンを抱え込み、席を立つ。

教室の戸口では、岩田がクラスの男子達とたむろしていた。葉太が通り過ぎようとする、岩田が「おう、木原」と呼びとめる。

「今から彼氏のところか。毎日通って御苦労さまだな」

「・・・・・・・・あー、ハイハイ。どうも」

相手をするのも面倒で葉太が流すと、それが気に入らなかったのか、岩田が短い足を延ばして戸口を塞いだ。思わず葉太はため息をつく。

「なんだよ、もう。何がしたいんだよ」

「なあ、木原。お前って本当にソッチ系なのか？」

「しつこいな、お前も」

「違うんだったら、水野とつるむのはやめとけよ。あいつは本物のホモだぞ」

真顔で告げた岩田を、葉太はポカンと呆気に取られて見つめた。何言ってんだ、こいつ。

「何を根拠にそんなことを・・・・・・・・」

「俺の勘だ」

「・・・・・・・・」

葉太はいよいよ脱力した。馬鹿に付き合うだけ時間の無駄だと思い、岩田の足を跨いで通ろうとする。しかし岩田が「待てよ」と足を上げたので、葉太は躓いてしまった。咄嗟に戸に手をついたから転ばずにすんだが、その拍子にマフィンを取り落としてしまう。

透明の袋に入れて口元をリボンで縛ってあったので、幸いにもそれで中身が床に転がることはなかった。だが、袋越しに少し潰れているのが見える。岩田がそれに気づいて「あ？」と怪訝そうに眉を顰めた。

「それ、さっきの調理実習のやつか。もしかして水野に持っていくところだったのか？ お前ら、本当に気持ち悪いな」

嘲る岩田に、葉太の中で何かが切れた。

「・・・・・・・・き、もちわりいのは、お前だっつーの！」

胸倉に掴みかかり、そのまま岩田の背中側にあった机に突き飛ばした。机が倒れる音が、教室中に響き渡る。

「朝から晩までキヨのことばっか言いやがって。ストーカーかよ！」

「んだと、この野郎！」

岩田が殴りかかってくる。最初の一発は避けられたが、二発目が腹を抉った。隙っ腹じゃなかったら、吐いていたかもしれない。しかし腹の熱い痛みさえ、頭に血が上った状態では葉太の拳を固くするだけだった。岩田の腹をめがけて殴りつける。

「キャーッ！」

「うるせーぞ、女子！ 先生が来る前に戸締りしろ、戸締り！」

ケンカと見て怯える女子とは裏腹に、男連中は祭りだとでも言わんばかりに盛り上がっていた。その間にも岩田とは取っ組み合いで、体のあちこちを殴られる。葉太も殴り返したが、如何せん体格差が不利だった。体勢を崩して倒れこみそうになり、葉太は無意識に岩田の腕を掴む。

「うおっ」

岩田は倒れる葉太に引っ張られて、一緒に倒れこんだ。瞬間、ガチッと歯が折れるような衝撃が走る。ついで唇に痛みが走り、ぬるついた生温かい感触と他人の湿った吐息を感じた。

「——・・・」

目の前には岩田のドアップがあった。その顔が、ユデダコみたいに赤く染まる。誰かが「げえっ」と吐きそうな声を漏らした。

「お前ら、何教室でチューしてんだよ！」

教室のあちこちで悲鳴が聞こえた。葉太は耐え難い嫌悪感がこみ上げてきて、渾身の力で岩田を突き飛ばした。廊下に転がっているマフィンの袋が目に入り、ほとんど無意識にそれを掴んで逃げるように駆け出す。

「・・・・・・・・っ」

違う、キスなんかじゃない。そんなのしてない。何度も頭の中で叫んだ。ただの事故で、唇がぶつかっただけだ。

切れた唇の端は痺れるように痛くて、血の味がした。

階段を駆け上がり、一組の教室に向かったところで、清隆と出くわした。それまで無表情だった清隆が、葉太を見つけるなり、まるで人形に生命が宿るみたいに明るく微笑んだ。

「葉太。今からそっちの教室に行こうと思ってたんだ。・・・・・・・・どうした？ 唇、血が出るぞ」

訝しげに問いかけてくる清隆に、葉太は無言でマフィンの袋を差し出した。清隆は困惑した顔で「何これ」と受け取る。

「・・・・・・・・うちのクラス、家庭科で。マフィンを作ったんだ」

「へー。じゃ、これ、葉太が作ったのか？」

「それは俺じゃない。同じクラスの安部さんに、お前に渡して欲しいって頼まれたんだ」

「阿部さん？ 誰それ」

告白されたことがあるはずなのに、清隆は覚えてないらしい。葉太は美香が直接渡さなくてよかったと思った。渡して「君、誰？」と言われたら、立ち直れないだろう。

「とにかく、渡したからな・・・・・・・・」

「葉太、ひどい顔色だぞ。その唇の怪我、どうしたんだ？ 頬も腫れてるし．．．．．誰かに殴られたのか」

「ぶつかっただけだよ」

「何に」

「．．．．．」

答えられなかった。答えられない代わりに、目の奥が熱くなって視界がぼやけた。清隆がぎょっとしたように目を見張る。

「葉太？」

心配そうな清隆の様子に、廊下を歩いていた生徒達も何事かとこちらに視線を寄越す。なんでもないとごまかしたいのに、少しでも動けば、堪えている涙が溢れてしまいそうだった。

人前で、清隆の前で泣きたくなかった。葉太にできる行動は唯一つ、その場から逃げ出すことだけだった。

「え．．．．．っ、葉太!？」

戸惑ったような清隆の声も無視して、葉太はひたすらに走った。だが、特別棟に繋がる渡り廊下であっけなく清隆に追いつかれて腕を掴まれてしまう。

「葉太！ どこ行くんだよっ」

強引に振り向かされる。その拍子に涙がこぼれた。清隆が驚いたように息を呑む。一度溢れた涙は止まりようがなく、葉太は肩を震わせて泣いた。

渡り廊下には誰の姿もなく、葉太のすすり泣く声だけが響く。

「もしかして．．．．．このマフィンくれた子の事が好きだったとか？」

見当違いなことを真顔で問いかけてくる清隆に、葉太はゆるく首を振った。

「．．．．．口、洗いたい」

「え？」

「トイレ、行く」

しゃくり上げて泣いてしまうために、片言みたいな変な話し方になってしまう。清隆は何も聞かずに「わかった」と言って、特別棟にある人気のないトイレへと葉太を連れて行ってくれた。洗面台の蛇口を盛大に捻り、顔に浴びせかけるように唇を洗う。だが何度洗い流しても、キスの感触は生々しく唇に残っている。

「葉太、そんなに洗ったら、余計に傷口がひどくなる」

「だって、気持ち悪いんだ．．．．．っ」

葉太はとうとう耐え切れずに、びしょびしょに濡れた顔で喚いた。

「俺、岩田なんかとキスした」

「．．．．．え？」

「初めてだったのに。あんな奴と、俺」

ファーストキスは海の見える場所で可愛い子と、なんて夢を描いていたわけじゃない。贅沢は言わないから、せめて好きな人とが良かった。好きな人の唇で、初めて他人の唇の感触を知りたかった。

それなのに岩田のタコみたいな唇を血が出るほど押し当てられて、これから先、誰と恋をしてキスをして、一生今日のことを思い出すのかと思うと死にたくなった。

水滴と涙で視界が滲む。それでも清隆が蒼白な顔をしていることだけはわかった。

「何があった？」

葉太はぐずりながらつい数分前に起こった出来事を全て打ち明けた。

最後まで話を聞いた清隆は言った。

「そんなの、ただの事故だろ。忘れろよ」

「教室で、みんなの前だったんだぞ。女子だったのに。忘れようたって……！」

葉太は嘔み付くように訴えた。慰めてくれているのはわかるが、今は何を言われても清隆に八つ当たりしてしまいそうだった。その荒れた気持ちを察したのか、清隆はそれ以上何も言わずに、ポケットからハンカチを出し、水滴と涙と鼻水ですっかり濡れそぼった葉太の顔を拭ってくれた。

「……ごめん。ありがと」

いくらか気が落ち着いてきた葉太は、ハンカチを受け取って自分で目元を押さえた。清隆は「いや」と俯く。

「元はといえば俺のせいだな。岩田のことは放っておいてもいいと思ってたんだ。だけど、早いうちに処理しておけばよかった」

「違うよ。ただの事故だって、キヨも言ったじゃないか」

それに、つまらない嫉妬で絡んでくる岩田が悪いのだ。清隆に何一つ落ち度はない。清隆は小さく笑った。

「葉太は優しいよな。俺なんかとつるんでるせいだって思わないのか？ こんな面倒ごとまで押し付けられて」

清隆は美香のマフィンを見せた。葉太はすぐさま首を横に振った。

「思うわけないじゃん」

清隆は「……そっか」と呟いた。そのまま、マフィンを洗面台の下にあるゴミ箱に捨てる。葉太はぎょっとして目を見張った。

「キヨ」

「受け取ったんだから、もういいだろ？」

「で、でも」

「知らない人からもらった物は食べないようにしているんだ。それにいくら偶然に過ぎなくても、葉太に迷惑をかけたものなんて見たくもないし」

清隆が、自分を気遣ってくれる気持ちは嬉しい。嬉しいけれど、はにかんだように笑う阿部の顔を思い出して胸が痛んだ。

「……キヨは好きな子、いないのか？」

思わずそんな質問が転がり出た。

「キヨを気にしてる女子、たくさんいるのに誰とも付き合わないだろ。誰か本命がいるのか？」

「今更だな。俺、葉太が好きなんだよ」

「だから、そうやってはぐらかすなよ」

葉太が苛立ったように言うと、清隆は黙り込んだ。ややあって探るように葉太を見る。

「なんでそんな話をしたがるんだ？」

「なんでって……だって、清隆に彼女できたら、周りも落ち着くと思って」

「なるほど。つまり葉太は、俺が彼女を作った方がいいって思うんだな」

「うん」

清隆は「即答か」と苦笑いをした。切なげな顔に葉太はドキリとする。誰に絡まれても平然としている清隆が、そんな表情を見せたのは初めてだった。

「あの、でもムリにはと言わないけど……」

「……そうだな、葉太の言う通りだ。いい加減、覚悟決めて告白しようかな」

「えっ」

葉太は驚いて目を剥いた。

「キヨ、好きな奴いんの!？」

「うん。今まで黙っててごめん」

「いや、いいけど……」

なんだろう。この、心を削ぎ落とされたような欠落感。葉太は無意識に胸元のシャツを握り締めた。自分で好きな子はあるのかと聞いたくせに、いざ本人にイエスと答えられると、驚きすぎて心臓が騒いだ。いや、驚いたって言うよりも。

ショックを受けているのか、俺は。葉太は自分の感情に狼狽した。

「そっか……うん。好きな子がいるなら、好きってちゃんと伝えた方がいい、よ……」

「うん。……葉太は？」

「え」

「葉太は好きな子、いないのか？」

清隆の黒い瞳が、静かに葉太を見下ろす。見つめ返していると、まるで光の届かない深い海の底を眺めているような錯覚にとらわれる。

葉太は騒ぐ心のまま、首を横に振った。

「いない」

「なんだ、それ。人のこと言う前に、お前も早く彼女作れよ」

清隆の手が、葉太のやわらかい髪を弄ぶように軽く撫ぜた。

「俺、教室に戻るけど。葉太、もう大丈夫？」

「……大丈夫」

「そっか。じゃな」

清隆が小さく笑って男子トイレから出て行くのを、葉太は金縛りにでも遭ったかのように身動きの取れないまま見送っていた。

いつも昼飯を一緒に取るのに、今日はそうしなかったことに葉太が気づいたのは、それから数分後のことだった。

教室に戻る気にはなれなくて、葉太は五時間目をサボった。

屋上へのドアは、南京錠で鍵をかけられている。葉太が入学する以前より、事故防止のために出入り禁止になっていた。だから、屋上への階段なんて誰も近寄らない。授業中なら尚更だ。

葉太は屋上のドアにもたれながら、空になったコーヒー牛乳のパックのストローをかじっていた。足元には購買で買ったパンの袋のカスが転がっている。男にファーストキスを奪われ、親友の恋を知り、いろいろと茫然自失な状態なのに、それでも腹は減った。

好きな子って誰？

葉太はポケットから携帯電話を取り出した。メールで聞くのは簡単だ。だけど聞いてどうする。

清隆が言わなかったということは、まだ言いたくないということなのかもしれない。

なんでこんなに落ち着かないんだろう。親友に先に彼女ができるかもしれないから、焦っているとか？ いや、そんなんじゃない。なんだろう、なんだか、すごく……嫌だ。

清隆の一番近くにいるのが、自分じゃなくなるのが嫌だ。胸が痛くなって、息をすることさえ苦しく感じる。

俺って結構、独占欲が強かったんだな……と葉太は小さくため息をついた。自分で思っていた以上に、清隆のことを好きだったらしい。

「——……」

好きって別に、変な意味じゃないけれど。変な意味ではない、はず、だ。

携帯がいきなりブッと震えた。生き物みたいに反応したそれに、葉太はビクつく。見れば清隆からメールが届いていた。あいつ、授業中なのに、と葉太は自分のことを棚に上げてメールを開いた。

『次の休み時間に告白する。いろいろ迷惑かけて悪かったな』

ラブのかけらもない、普通のメールだった。つまらないメール遊びなどやめてほしいと思っていたが、葉太は急速に清隆が離れていく気配を感じて不安になった。

『迷惑とかやめろよ。友達だろ』

伝えたいことが山のようにある気がするのに、無難な返事しか書けない。程なくして返信があった。

『ありがとう。岩田のことは大丈夫か？』

『授業サボってるから、岩田にはまだ会ってない。でも、気にしないようにする』

葉太が返信してしばらくして、清隆から『わかった』と返信があった。葉太はくすぶった気持ちのままため息をつく。

「・・・・・・・・わかったって、何がだよ」

こっちは何にも、自分の気持ちさえわからないのに。

葉太はそのまま床の埃がつくのも構わずに寝転がった。五時間目が終わったら、ちゃんと教室に戻ろう。清隆が自分の気持ちと向き合って前に進もうとしているのに、一人だけ逃げているわけにもいかない。

とりあえず、岩田は一発ぶん殴っておいて、それで終わりにしよう。

後のことはもう、何も考えたくなかった。

教室に戻る廊下の途中で、最初に出くわしたのは美香だった。重い足取りで歩く葉太を見つけるなり、美香は「あっ」と声を上げて葉太のもとに駆け寄ってきた。

「木原君・・・・・・・・！ ごめんね、私のせいで岩田君ともめちゃって」

なんだか今日はよく謝られる日だ。葉太は「安部さんのせいじゃないよ」と笑みを取り繕う。だけど心の中にある虚しさは消えない。美香は上目遣いで葉太を見る。

「それで、木原君・・・・・・・・頼んでたことなんだけど・・・・・・・・」

「ああ、ちゃんと渡し・・・・・・・・」

「もらったよ」

背後でいきなり声がした。振り返ると清隆が立っていた。美香の顔が一気に林檎のように赤くなる。

「み、水野君」

「だけど、次からは受け取れない。俺、好きな人がいるから」

清隆は何でもないことのように淡々と言った。美香の顔が青ざめるのでさえ無視して言う。

「ところで岩田は？ 教室にいるのか」

美香がこくりと頷く。清隆は「ありがとう」と言って教室に歩き出した。葉太は慌ててその腕を掴む。

「お前、岩田ともめる気じゃ・・・・・・・・」

「大丈夫。葉太が心配するようなことは何もないから」

清隆は小さく笑った。不安な気持ちは消えなかったが、葉太は力なく手を離した。だけど一人で行かせるのは気がかりで、葉太も一緒に教室についていく。

教室の戸を開けると、中でガタッと慌しい音がした。見れば中央付近の席に座っていた岩田が、耳まで赤くなって葉太を見ていた。どうやらさっきの音は机で足をぶつけたらしく、机が斜めに前に出ている。

他の生徒たちも、岩田の過剰な反応に気づいて葉太の方を見た。

「岩田ァ、彼氏のお帰りだぞー」

「るせえ！ ぶっ殺すぞ」

どうやら岩田はさんざん彼らに揶揄われていたようだ。岩田が絡んできたのが原因とはいえ事故だったのだから、岩田にも気の毒だったかもしれないと、葉太は動揺する岩田の姿を見て初めてそう思うことができた。

岩田も、ファーストキスだったっばいしな・・・と苦い気持ちになりながら思っていると、岩田が「おい、木原！」と立ち上がった。

「皆にちゃんと言えよな。お、お前がムリヤリ、あんな真似したんだって！」

「・・・・・・・・・・は？」

「転ぶ時、俺の腕掴んだだろうが！ そのせいで、あんなことに」

葉太はちょっとでも、岩田に同情したことを後悔した。怒りで声も出ない。震える肩を軽く叩いたのは清隆だった。

「葉太、そこにいて」

「・・・・・・・・・・キヨ？」

清隆は葉太の傍を通り過ぎると、教室の中に大股で入っていった。そしてまっすぐ岩田の前まで行き、彼の真正面に立った。

岩田もでかいが、清隆も身長がある。両者が並んで睨みあうと、それなりに迫力があつた。不穏な空気に、教室のあちこちで女子が小さく騒ぐ声がする。

岩田がたじろいのように「な、なんだよ」と言った。

「言っとくけど、木原が悪いんだからな。俺は嫌だったのに、木原がムリヤリ」

「葉太にムリヤリ、キスされたって？」

「そうだ！ 木原はどうか知らないけど、俺はホモじゃねーからな。俺は被害者だ！」

大きな声で、教室中に響くような声で岩田は言う。この調子で昼休みからずっとわめいていたのだろう。教室中からは憐れみの視線もあったが、あきらかな好奇の目もあることに気づき、葉太は思わず俯いてしまう。恥ずかしくて悔しかった。

清隆が「へえ」と抑揚のない声で相槌を打った。

「俺はお前さえ葉太に絡まなきゃ、こんな事にはならなかったと思ってるんだけどな」

今まで一言も反論したことのない清隆に意見されたとあって、岩田はますます怒りに顔を赤らめた。けれど清隆は落ち着いた声で続ける。

「事故だったんだよ。葉太とはな。・・・・・・・・・・だけどこれは、事故じゃない」

その出来事は、まるでスローモーションみたいにゆっくりと見えた。清隆の白い手が、岩田のせんべいみたいにゴツゴツした頬に触れる。それから清隆の淡い赤色をした花びらのような唇が、岩田のタラコ唇に重なった。二人がキスしている時間はほんの二、三秒だったけれど、葉太には永遠に近い時間を感じた。

教室内は葉太の耳がおかしくなったのかと思うほど、音を無くしていた。誰もが二人に注目していた。

やがて清隆がそっと唇を離し、見惚れるほど妖艶な笑みを浮かべる。

「どうだった？ 俺のファーストキス」

岩田は、目を見開いたまま「な・・・な・・・」と妙な音を発するばかりで、ろくに喋れていなかった。葉太は目の前で起こった光景が信じられなかった。

だが「イヤァッ」という女子の悲鳴でハッと我に返る。戸口に立って一部始終を見ていたらしい美香が悲鳴を上げて走り去るところだった。そしてそれを皮切りに、怒号のような悲鳴のような、凄まじい叫び声があちこちで起こった。そんな有象無象の渦中にある清隆は、やはり顔色一つ変えずに微笑んでいた。

「まあそういうことだから岩田、葉太のことは忘れて、俺のことを考えておいてくれよ」

「み、みず、水野、おま」

「うん。俺、実はゲイでさ。・・・好きだよ、岩田」

にっこりと微笑む清隆に、岩田は見たこともないくらい赤くなった。そして鼻からツーツと赤い筋を垂らす。どうやら頭に血が上りすぎたらしい。鼻血を出した岩田は慌てて顔を抑え、「くそっ、覚えてろよ！」という妙な捨て台詞を残して教室を飛び出していった。

清隆はやれやれとういように肩を竦めて、葉太のほうに歩いてくる。愕然と立ち尽くす葉太に、清隆は小さく苦笑した。

「引いた？」

「・・・キヨ、お前」

本当に、岩田なんかを？

清隆は笑って、葉太の頭をくしゃりと撫ぜた。

「もう俺と友達でいるのムリ？」

「そんな・・・っ」

そんなことはない。ない、けれど。

なんだろう。ひどく泣きたい気分だった。唇を噛み締めて俯いた葉太に、清隆は「いいよ」と言った。

「わかってる、まあそうだよな」

「ちが、俺は・・・っ」

「俺は大丈夫だから」

頭に載っていた清隆の手が、するりと離れた。清隆は寂しそうに笑っていた。

「・・・今までありがとう。葉太」

後篇に続く